

令和2年度 古文書講座（中級編）三日目 解答
史料「天満天神於江戸開帳之覚控」〔北野天神社文書No.781(部分)〕

〔表紙〕

享保七壬寅年

天満天神於江戸開帳之覚

享保六辛丑年ヨリ翌年迄之控

〔本文〕

当社神体不開来ニ付

御公儀江書上候通ニ不違儀ニ候哉、為念拝見申度

数年心かけ候を以、享保六辛丑年五月九日開候而、

急ニ前之夜より北野村江相触レ一郷計参詣致させ候、

上江書上候通ニ少茂無違候、中ニ神体小宮之板ニ元和

七年之書付、伊勢守綱景自筆ニテ候、其小宮

則宮之内ニ取置申候

同七月十日より祭礼執行ひ、遠近参詣夥敷儀ニ

候内ニ、同月廿三日神体之小宮并載セ置候高机迄江

閏七月御月番之

松之葉之形生シ候ニ付、其旨寺社御奉行松平対馬守殿江

相達シ生シ候物迄懸御目、八月より於江戸開帳奉願

候得共、急成儀来年可然筋ニ付、生シ候物者変シ可

申茂難計神体之開帳計を奉願、則相叶

翌年寅四月朔日より小日向目白不動境内ヲ

借地いたし観音を本堂江移し、其堂江小屋ヲ

さしかけ致開帳候

栗原主殿事ハ長谷寺之玄関より座席迄を

借り宿坊と定め、表門をも主殿方江之出入ニ借り

宿札ヲ門柱ニ出シ、玄関ニ紋付幕ヲうち、持鑓一筋

かけ置六月十一日過迄致在府候、委細之趣控・下書等

有之候

一 右丑七月於北野祭礼之節社中見世之儀者内藤宿

若松屋勘兵衛、油屋太兵衛ニ申付、芝居并小見世物等

数ヶ所免之主殿家来引田平八郎ニ支配申付ル

一 僧尼禁制之例ニ候得共神体ヲ近ク拝させ

今度計ハ

古来之像を信仰有之様ニト 僧俗隔なく
本社江近ク入候、殊ニ松之葉之形生し候後ハ猶以
近ク諸人ヲ入申候、此節神祭之儀者沢田采女
致支配候

- 一 寅三月廿八日 神体江戸江出、栗原主殿儀
寺社御奉行所者不及申、外ニ盜賊御奉行
安部式部殿、山川安左衛門殿江相勤、御鳥見
三人江茂廻り申候

三月廿八日

道中之格 道中之儀

上江為念如左書上申候用人之鑓迄書上ル

北野天神開帳と六字書候幡二ツ先江立、其次
乗かけ馬数多、旅衣裳ニ而社家其外由諸有
供奉之輩先キ乗りをいたし候

- 一 神体者箱ニ入、白布ニてつゝみ注連を張り、木札ニ
北野天神神体と六字書、輿之ことくニて
両脇ニ侍五六人羽織もゝひきにて付キ、其外ハ
信心人之供奉旅衣裳ニて数輩付キ、江戸
水道町迄数多之町人ハ麻上下ニて迎ニ出供奉
「下」とめ申候

一 次ニ栗原主殿乗物六尺四人、旅衣裳之供侍

乗物之先□

三四人 具足箱、弓・刀筒等、鑓ハ二筋計ニ而

挟箱

立傘、びらうどの袋、牽馬、合羽籠、沓籠等

此後へも

用人一人乗かけニて供いたす跡ニ乗り、鑓もたせ候
昼休者田無宿

神体旅所山川権左衛門所ニ而候、札之趣者

三月廿八日

朝五ツ時 北野天神旅所 如此之札ヲ先達而遣ス

栗原主殿者

同宿伊藤甚左衛門所昼休也、札之趣

三月

廿八日 栗原主殿昼休 如此之札先達而遣し

廿八日に至而紋付幕をはり
宿之亭主はかま着し迎ニ出ル、同宿名主下田

孫次郎ハ

麻上下ニて罷出ル、道中段々名主より人足を出ス、
名主又者名代等罷出ル

一 廿八日之夜於目白 遷宮之格執行

祭主 沢田采女

一 四月朔日より開帳

一 北之方江引つゝけ四間小屋かけ、七幅之御絵と

自筆之法花経二色計開キ外之物曾而不出之

一 目白境内有来ル茶屋をのけ外之地不残

借地、主殿用人尾崎嘉吉ニ支配申付ル、

盜賊方与力中初諸事之御役々被廻候節

嘉吉罷出御指図を承ル、嘉吉ハ火事羽織等

又ハ時ニより羽織はかま着シ、尤礼日ニハ上下

○裏付上下五月以後ハ

着ス、寺社御奉行所江差遣候節大かた○もじ

肩衣ニて参上仕らせ候

一 開帳場之諸色町人等頼ミ置鳶之もの

等も

四人開帳中召かゝへ置候

一 神事之勤行者沢田采女狩衣又ハ時ニより

麻上下等着ス

一 栗原主殿儀者於北野社法のことく朔日

十五日、廿五日、廿八日社参ス、常例のことく

上ミ下モ着ス、併常より改メ長上下着ス、

重立候神事茂開帳中無之儀勿論故

主殿儀者不及装束

一 開帳中諸大名并奥方目録等数多

嘉吉方

被捧参詣有之候、別紙ニ控有之候

[後略]